

# 白磁観音像の生成と請来

—山形県鶴岡市の白磁観音像 2 体から

山 口 博 之<sup>※</sup>

## はじめに

白磁観音像は明代後期から福建省徳化窯で生産されたものが有名である。小考では山形県鶴岡市に伝わる 2 体の白磁観音像（羽黒山像・大昌寺像）の調査から発し、存在の周辺について知りえた内容を述べてみたい。なお、2 体の像は貿易陶磁研究誌上にて、資料紹介を行ったところであり、行論の都合上一部重複を含むことをお断りしておく（山口 2022）。

徳化窯は中国福建省の泉州市の北西の山地、徳化县にある。ここは中国三大瓷都（江西景徳鎮窯・湖南醴陵など）とも呼ばれている。徳化窯で生産された白磁は、すでに宋・元時代には、東南アジアなどに海路で大量に輸出されていた。宋代沈没船南海一号（沈没年代は宋代、乾道通寶（1165 年初鑄）より早くはならない）には大量の徳化窯製品が、積載されていた（国家文物局水下文化遺産保護中心ほか 2017）。明・清時代、徳化窯の白磁製品はヨーロッパへと販路を広げ、ブラン・シノ（Blanc de China、中国白）とも呼ばれ珍重された。

白磁観音像は 17 世紀頃を中心として焼造され、西欧・東南アジア・日本に広く受け入れられた。子供を抱く白磁観音像は、日本ではマリア観音として知られ、江戸幕府のキリシタン禁制下に信仰を続けた、潜伏キリシタンに関わる信仰・歴史資料という位置づけもある。なお、潜伏キリシタンと白磁観音像の関りについては、若桑みどり氏（若桑 2008）、宮川由衣氏（宮川 2020、2021）、原千夏氏（原 2021）ほかの詳細な研究があるのでご覧いただきたい。

若桑みどり氏は、現存するマリア観音像を 3 分類（第 1 型：子どもを抱かない立像、第 2 型：胸中央または脇に子どもを抱き片膝を立て座す像、第 3 型：白衣を被って子どもを抱き左右に脇侍を伴う像）とした（若桑 2008）。原千夏氏は、7 分類（若桑氏の第 2 型を 4 類細分、第 3 型を 2 類細分）とした（原 2021）。羽黒山像は若桑氏第 3 型で原氏第 3 型Ⅱ類に、大昌寺像は若桑氏第 2 型で原氏第 2 型Ⅱ類に分類される。なお、若桑氏の 3 分類であるが、徳化窯製品では第 1 型は子供を抱かない観音立像、第 2・3 類型は子供を抱く送子観音となる。以下では若桑氏の分類を基準とした。

---

※ 東北学院大学東北文化研究所客員

## 1 山形県鶴岡市の白磁観音像 2 体

鶴岡市は山形県北西部の日本海側にある。中世には大宝寺武藤氏が勢力を張り、近世には酒井氏が鶴岡を城下町とし一帯を治めた。この地に、17世紀前後の中国製白磁観音像2体（出羽三山神社・大昌寺）が残されている。なお、羽黒山像と大昌寺像の画像は各所蔵先から画像使用の許可を得、原千夏氏から画像の提供を受けた。

### (1) 出羽三山神社所蔵の白磁観音像（図1）

高さ 21.1cm 最大巾 10.3cm 厚さ 4.5cm

出羽三山神社所蔵の白磁観音像（羽黒山像）は、中央に岩座に座る子供を抱く観音と、左右に岩に立つ脇侍（童子・童女）を配する三尊像である。観音は台座に座り左足を降ろし、右足の甲を左足の太腿に載せ跏趺坐する。左足の足先は裸足とし衣文から覗かせる。眼差しを正面に据える。ゆったりとした衣装をまとい、頭からベールをすっぽりとかぶり、胸元には首飾りを身に着ける。岩座には龍と波濤が浮き彫りにされ、一頭の龍の足は観音の左足を海中から支える形をとる。岩座から左右に伸び台座となる。向かって右は箱（経箱力）を置くが、左は空座となる。観音は右手で童子を抱き、組んだ右足の上に乗せ、左手は衣文の中にある。右手は人差し指と小指を外側に、中指と薬指の二指を内側に折る。被る宝冠は中央に十字型の意匠を見せ、宝冠とベールから覗く髪は幾筋かにきれいにまとめられる。膝上に抱かれた童子は、観音とほぼ同様の動きをして坐り、両手で胸元に蓮茎を持つ。頭部は赤味を帯び、目鼻などの顔貌が表現されないことから、後補の可能性が考えられる。向かって右には両手を胸元で合掌する童子（金童）、左には宝珠をもつ童女（玉女）を配する。童子は頭髪を一つ結びとするいわゆる唐子の頭髪である。童女は現代のドレッドヘアのように髪をまとめ上げている。ややくすんだ光沢の白磁観音像である。



図1 出羽三山神社所蔵白磁観音像  
（原千夏氏撮影・提供）

### (2) 大昌寺所蔵の白磁観音像（図2）

高さ 21.8cm 最大巾 8.7cm 厚さ 5.4cm（台座を除く）

現在は秘仏として守られている。木製の台座に固定されているため、計測は露出部分の法量である。総高はほかの事例から考えて22～23cmほどと考えておきたい

大昌寺所蔵の白磁観音像（以下大昌寺像）は、岩座に座り跏趺坐し子供を両手で抱く。ゆったりとした衣装をまとい、足は衣文から覗かせない。頭からベールをすっぽりとかぶり、襟を大きく広げるが、胸元に瓔珞などの装飾はない。やや左側に顔を傾け、視線は抱く童子に注がれる。両手は童子の腹部に添え、右手を下、左手を上として抱き、跏趺した右足の上に乗せる。足先は衣文の中にあり露出しない。右手指先が欠失しているが、残存部の観察では、親指を開き人差し指と小指を外側に、中指と薬指の二指を



図2 大昌寺所蔵白磁観音像（原千夏氏撮影・提供）

内側に折る羽黒山像と同様な形と思われる。左手は甲の半ばから指先を欠失するのでよくわからないが、広東省博物館所蔵の徳化窯観音像などからすれば、右手と同様な形をとると思われる。なお、破損した右手と左手はやや赤みを帯びた色調に変色している。岩座にはうねうねとした筋がいくつも表現され、半球状の欠きこみが施されるが、波濤の表現はない。こうした岩座も、子供を抱く一尊像の場合には多い。

宝冠は被らず、ゆるやかに右側にウエーブするベールから覗く髪は、幾筋かにきれいにまとめられている。膝に抱かれた童子は、観音とほぼ同様の動きをして坐り、両手を衣装の中で胸元に組み、右足を露出する。目鼻さらに頭頂にまとめられた頭髪がはっきりと残り、観音と同様に視線をやや右側に向ける。隠された両手で蓮の茎を支え、蓮の花弁は観音の胸元下方に見えるものがそれであろう。なお他の事例では、童子の視線には左右幾種類がある。

成型はいくつかの型を使用しているものと思われる。右手と左手は別造りで差し込んでいる。掻き抱く童子もまた別造りである。別造りの童子が持つハスの茎に結ぶハスの花が、別造りの観音の胸元に表現され、連携しているのは巧みである。さらに、蓮をもつのは「蓮生貴子」で子どもを授かる吉祥図案に通じる。

胎土はやや黄色味を帯びる粘土質のもので、徳化窯の白磁観音像であると考えられる。一部に窯内部の降灰に拠ると思われる黒色の付着物がある。保存状態は、首に大きな黒色の接着痕跡があり、台座にも漆継ぎと見られる接着痕跡がある。さらに顔貌と岩座に嵌入があるが状態は安定している。指先の欠失を除けば完存に近い。白磁としての発色も良く全体的なバランスも均衡がとれ美しい見事な像である。

次に、2体の観音像の由緒について整理してみたい。

### (3) 2体の観音像の評価と由緒

2体の観音像にはマリア観音との評価がある。この評価の周辺について整理してみよう。

#### ① 羽黒山像

羽黒山は出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）の一つで、古くから山岳修行の場として知られ、中世以降は羽黒修験の本拠地として発展した。その信仰圏は広く、羽黒出羽神社の末社は東北・関東・中部に広がり、旅日記（近世中後期）は、東北・関東・東海・近畿・山陰地方に残る。羽黒山は観音信仰と関係が深い。『羽黒町史』によれば、羽黒山の本地仏は観音、月山は阿弥陀、湯殿山は大日（胎蔵界）とされる（戸川 1996）。

羽黒山像は「佐藤仏像コレクション」に納められていた資料である。『出羽三山歴史博物館蔵佐藤仏像コレクション解説』によれば、このコレクションは、酒田市に在住されていた佐藤泰太郎氏が収集されたもので、廃仏毀釈によって荒廃した、出羽三山の諸堂宇より流出した仏像・仏具が主体となり、一部には奈良・京都で入手した資料も含まれるという（出羽三山歴史博物館編 1975）。羽黒山像については「マリア観音 白磁マリア観音像 佐藤コレクション中に見られる一軀は、白衣を頭から纏っているが、その頭正面に十字架が判然と見えるのに注目しよう。」とある。宝冠正面の十字架に注目しマリア観音とするのである。なおこの像を聖母マリアとする信仰があったのかどうか、さらにはキリスト教との関りなどについては、触れられていない。

#### ② 大昌寺像

鶴岡市山王町の證玉山大昌寺は曹洞宗寺院であり、開創以来400年を超えるという古刹である。大昌寺像の由来については同寺に説明版と新聞記事がある。まず説明版には「大正末に遠藤カメヨよ

り寄進せられたもの」と記される。昭和5年(1930)『鶴岡日報』には「大昌寺地藏堂へマリヤ観音日雇い女が寄附した珍品」と題する記事が載せられている。寄附した遠藤カメヨは「全人方に可成り古い時代からマリヤ観音を安産地藏尊と思い持仏堂へ安置してあったのを、カメヨは粗末に取扱ってならぬと感じ数年前全寺へ寄附を申出で、塵埃と煤にまみれ真黒になった尊像を持ち込んだもので」とあるという。これを伝え聞いた当市天主堂駐在宣教師ライニルケンス氏(カトリック鶴岡教会第6代主任)は調査を行い、「全像は島原の乱以降切支丹宗奉信者の手で肥前長崎地方で謹製された頗る貴重な霊像であることが明瞭となった」とみた。さらに像の生産地と時期は「島原の乱があった後に肥前長崎地方でつくられたマリヤ観音像で(中略)一般的な仏像の観音さまの様式を以て聖母マリヤを現はしイエスキリストは可愛らしい乳児時代の釈迦を模して、マリヤに抱かせてあります。要するに之は国禁を冒して奉信せる切支丹の信者達が幕吏の眼をのがれる方便として造られた(後略)」とし、類品が、日本海側の港町由良にもあるらしいと記事が続く。

以上からすれば羽黒山像がマリヤ観音であるという見解は、宝冠の正面に十字架の文様が付くことが根拠なのであろう。また、解説の刊行年1975年ごろにこの見解が成立したとすれば、東京国立博物館で所蔵される類品が、マリヤ観音として報告されていることにも影響されていると思われる。大昌寺像は、1930年の見解でありライニルケンス氏の整理が根拠となっている。同氏の見解は、徳化窯製品の白磁観音像がマリヤ観音と呼ばれ始めたころの認識(肥前長崎の造像、仏教観音像、信者達が幕吏の眼をのがれる方便)を示す。興味深いのは、もとは安産地藏尊と思い持仏堂へ安置してあったという記事内容である。後述するが徳化窯の子どもを抱く白磁観音像は、送子観音像であり、子供の誕生の信仰と密接に結びつくものであった。

2体の白磁観音はマリヤ観音との由緒を持つが、キリスト教信仰がこの周辺にあったことは確認できない。羽黒山像はそもそも観音霊場にあり、大昌寺像は地藏堂にあったという。

なお、白磁観音像が徳化窯製品であるという認識であるが、上田恭輔氏が昭和4年(1929)に刊行した『支那陶磁の時代的研究』で、「日本のキリシタン信徒の為に無数に輸出された白磁の子持観音像の如きも、中には福建の徳化窯の作品もあるが、大部分は景德鎮の白磁である」とした(上田1929)。白磁観音像が徳化窯製品を含むということを指摘した。十分に資料を調査したわけではないが、管見の限りではあるが早い事例となる。今日では観音像の多くは徳化窯製品であると理解されている(東博2002など)。

さて、日本にはこうした白磁観音像がどのくらいあるのだろうか。存在についてはなかなか情報を得られない。現在残されている資料は50を超すと思われる。原千夏氏が集成を進められているので成果に学びたい。管見の限りでは47点ほどが確認できる。まず東博所蔵資料が多数である。白磁観音像のうちマリヤ観音として掲出されているのが37点(第1型14点、第2型2点、第3型21点)、ほかに残欠資料23点を数える。ついで、西南学院大学博物館に第3型の三尊像(宮川2020)。ついで山形県鶴岡市羽黒山に第3型の三尊像。鶴岡市大昌寺に第2型。新潟県佐渡市羽茂町大蓮寺に第2型マリヤ観音(八重樫忠郎氏ご教示)。長崎市榎山町で2022年に確認された第1型と第3型(読売新聞オンラインHP)。サンタ・マリア館所蔵の第3型の三尊像(沈薇薇2011)。大浦天主堂キリシタン博物館には右膝を立てる一尊像、梅花学院大学博物館には第2型(原2021)。などが伝世品として存在する。なお、長崎市には出土品の白磁観音像破片があり後述する。ほとんどが伝世品であり、出土品は1点に過ぎない。

以上からすれば、日本に入った徳化窯白磁観音像は、羽黒山像の三尊形式が多く、次いで立像となり、大昌寺像の坐像は非常に少ない。興味深いことに、最も典型的な聖母子像に通じる、立像で子供

を抱く白磁観音像の完形品は今のところ見当たらない（東博には両手を欠失する立像があるが）。東博 82 の聖母子立像（97cm）は木造で 19 世紀という。

次に徳化窯での白磁観音像生産について概観してみよう。

## 2 中国での白磁観音像の生産

そもそも日本でマリア観音として知られる白磁観音像は、生産地の中国では送子観音像として信仰を集めた造形であった。送子観音は子供（男子が望まれた）を授ける観音で、子供を抱く姿をとり、現在も盛んに信仰されている。

### (1) 送子観音としての白磁観音像

観世音菩薩自体はもともと雄健な男子像であったが、時代を経るにしたがって、徐々に女性化してゆく。そもそも観音菩薩は子供の出生にかかわることが出来た。観世音菩薩の功德を説いた『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五』には「若有女人。設欲求男。禮拜供養。観世音菩薩。便生福德智慧之男。設欲求女。便生端正有相之女。宿植徳本。衆人愛敬。」とあり、子を授かりたいときには観世音菩薩に礼拝供養をすることにより願いがかなえられることが記される。観世音菩薩は子供の出生の願いを聞き届けてくれる仏なのであった。中国明代には送子観音信仰が盛んになる。

謝明良氏によれば、そもそも送子観音は、古代インドに淵源を持つ鬼子母の信仰が時代とともに変化し発展したもので、明代以降の子供を抱く観音像は、鬼子母の造像儀軌にあるという。鬼子母を送子観音と呼ぶのは早くは宋代にあり。元明代以降鬼子母は送子観音、送子娘娘に取って代われ、様々な文献に散見されるようになったという。鬼子母は日本では鬼子母神としてなじみ深い（謝明良 2012）。送子観音信仰の対象が、子供を抱いた送子観音像である。

さて、日本での送子観音につながる信仰であるが、送子観音のもととなる鬼子母神（訶梨帝母）像は、木造では、平安時代後期の東大寺二月堂の「木造訶梨帝母坐像」と鎌倉時代の三井寺「木造訶梨帝母倚像」。絵画では醍醐寺三宝院旧蔵「絹本着色訶梨帝母像」と奈良国立博物館の絹本着色「普賢十羅刹女像」に鬼子母神がある。おそらく平安時代後期から鎌倉時代初めごろから造形が盛んになるのであろう。

韓国でも日本に重なる時期に出現するようである。袁泉氏によれば、ソウル市の崇実大学教会博物館の聖母マリア陶製像（高さ 7.2cm、最大幅約 3.8cm、厚さ 2.8cm）とされる像は、舟形の背光をもち中央に一人の女性を表す。手には一人の子供を抱き、さらに 8 人の子供が両側に並んでいる像である。これは統一新羅時代にキリスト教が韓半島に伝播されたという証拠という見方があったが、像容の比較分析により、中国の宋（960～1279）・金（1127～1234）代に作られた、仏教信仰に基づく鬼子母像であると整理する（袁泉 2017）。日本と韓国では、12～13 世紀に、鬼子母に対する信仰が盛んになった。さらに中国では明代には送子観音として、子供を抱いた観音像が盛んに作られるようになっていくのである。

次に、白磁観音像の生産について見てみよう。

### (2) 中国での白磁観音像生産

白磁観音像の生産で、特に代表的な生産窯が徳化窯である。徳化窯の規模は大きく宋・元・明・清から民国期の窯跡は 238 箇所存在し、いくつかの窯跡群に分かれて存在する。焼造される中に観音

像を含む雕塑があり、仏像・神像・歴史人物・人物・冥器瓷俑・動物・群雕・組雕、そして西洋人物などの種類がある。特に明代の徳化社会は安定しており、宗教に関連する造像を大量に産出し、特に仏教の影響を受け、観音の造形は多彩で生き生きとしているという（葉文程ほか 2003）。

概観すれば徳化窯の白磁生産は宋代に始まり、明清代には盛んに海外に輸出されていた。『徳化窯（上）』によれば、輸出先はヨーロッパや東南アジア諸国を中心とし、東アフリカにまで広がる（葉文程 2005）。明代、宋応星が著した『天工開物』の「白磁 付 青磁」条には「白い陶土を堊（あ）土という。製陶家がすぐれて美しい焼物をつくるのに用いる。中国で産出するのは五、六カ所で、北方では真定府の定州、平涼府の華亭県、太原府の平定州、開封府の禹州であり、南方では泉州の徳化〔土は永定に産し、窯は徳化にある〕、徽郡の婺源、祁門（白土は成形がうまくいかない。壁の上塗りに使ったりする）である。さらに徳化窯はただ仙人の精巧な人物や玩具だけを焼き、実用には適さない」とする。徳化窯の陶土が優れ白磁雕塑像が有名であったことが記されている。なお、陳建中氏は、この内容には問題があり、明代の交通事情では陶土を永定（徳化の西南）から徳化に運ぶのは不可能であり、徳化は資源が十分豊富であると解説する（葉文程ほか 2003）。

徳化窯の白磁生産は清代のはじめにはその品質を下げたという。曾凡氏によれば、白磁はこの時期青花磁器にとってかわられ、白磁も焼かれるが、明代以来の窯は操業を停止するものがあつた。郭柏蒼は『閩産録異』を引き「徳化窯…順治以前、老窯が製造した仏像、尊、磬、壘（ライ）、瓶、杯、罍（カ）はすべて精緻で古雅であつた。純白の中にピンクが現れ、今では価格が跳ね上がっている。近ごろは胎が厚く、釉薬は透明で薄く貴ばれない」といい、昔のものは品質が良く価格が高くなっているという。鄭成功父子が清朝覇権に30年以上も抵抗し、海路が封鎖され対外貿易が断絶されたことに加え、烽火が多発したことが徳化窯の生産に壊滅的な打撃を与えたのが原因とされた。康熙（1662～1722）以降になると、社会は比較的安定したが、徳化の白磁は名誉を回復することができず、その製品も注目されなくなったという（曾 2001）。

ただ、生産は後代に連続していた。大英博物館のPDF（パーシバルデビッド中国美術財団（略称PDF））コレクションには清朝から民国期の徳化窯塑像が収納されている（四日市康博氏提供画像）。明治41年の日本国農商務省商工局の『清国窯業調査報告書』には、景德鎮陶業、徳化陶業、石湾陶業が詳細に取り上げられている（農商務省商工局 1908）。徳化窯の産品は「日用飲食器其他一般ニ小形ナル磁器トシ大器ヲ製スル稀ナリ産額ハ1ケ年10万円ニ滿タズ其販路ハ福建省内ヲ主トセリ」と記される。このときの景德鎮の年間産出額は約400万円と記されるので、ずいぶん規模は小さい。さらにその生産品であるが、「徳化磁器ハ原料坯土ノ性質上ヨリ大器ヲ作ルコト頗ル難ク花瓶ノ如キハ高サ二尺二三寸、鉢類ニ在テハ直径一尺二三寸深サ七八寸ヲ最大限トセリ然カモ製造ノ疵物ヲ出ス多ク（中略）製品ハ概シテ小器物ノミニシテ散蓮華形小匙第一位ヲ占メ茶碗、飯碗、小皿。盃類之レニ亜ギ置物、香炉、花瓶、土瓶等亦之ニ次グリ而シテ置物ハ観音、布袋、西王母等其主ナルモノナリ」。生産は70cm以下のものであり、日用品と置物が中心であつたという。注目するのは置物に観音像があることである。福州での徳化窯製品の価格が示してあり、「白磁二童子付観音置物（高七寸五分）一箇 約50銭」（P74）とある。これは三尊形式の送子観音像と考えられる。なぜ福州の価格が調査されているかといえば、徳化から海外に輸出するための外港が、厦門（徳化>厦門4日半）または福州（徳化>福州6日）であつたからである。

質の良い製品は明末を中心とすること、明末清初の動乱期には生産は活発ではなかつたこと、18世紀初頭以降に生産は安定してきたこと、さらに、徳化は山中に位置するために外港（福州・厦門）までには輸送が必要であり、これには多額の経費（運送費・税金）が必要であつたことも整理してお

きたい。福州と安海（泉・漳州）船は長崎へ盛んに往来した（廖赤陽 1999）。

なお加えておきたいが、送子観音やほかの造形物は象牙や木彫・石でも盛んに作られた。東博資料にも多様な素材がみられるが小稿では詳しく触れない。

### （3）徳化窯の白磁観音像の生産

徳化窯の白磁雕塑を生産する窯は分布が把握されており、発掘調査されている地点もある。

王羿雲氏によれば、まず、蓋徳郷蓋徳村の碗坪崙窯では宋元代に製品の焼造が行われていた。ついで明代徳化白釉磁窯跡には屈斗宮窯（図3）、嶺兜窯、後窯、東頭内窯、西門頭窯、大草浦窯、後所窯、祖竜宮窯、三班内阪窯、新墩寨窯、桐嶺窯、三班旧窯、新窯、啤唄窯、石坊窯、双溪口窯、蘇田窯など30カ所以上がある。有名な屈斗宮窯跡は県城浔中鎮宝美村破寨山の西南斜面に位置する。ここからは白磁観音像（図4）と梅花杯（図5）が出土している。わたしは、この現地を調査したことがあるが、出土量に驚いた覚えがある。後窯、祖竜宮窯、嶺兜窯でも類品が出土している。



図3 屈斗宮窯跡（筆者撮影）



図4 屈斗宮窯跡白磁送子観音像（筆者撮影）



図5 屈斗宮窯跡白磁梅花杯（筆者撮影）

甲杯山窯は浔中鎮宝美村甲杯山の麓にあり、発掘調査が行われた。ここは中国国外の博物館や個人が収蔵している資料の窯跡ということで注目されている。資料中には観音、弥勒、童子、福德正神とヨーロッパの造形をした聖母マリア、海外の生活を表した彫刻、キリストなどの人物の雕塑作品が含まれている（王羿雲 2011）。栗建安氏によれば、甲杯山窯の出土品には多くの雕塑作品（観音・弥勒・文昌、仕女、力士、童子、獅子、牛、猿、鶏）が含まれ、甲杯山窯の製品は国外への輸出用であったという（栗建安 2004）。栗氏の紹介した甲杯山窯跡出資料には、三尊形式の観音像がある。左手を欠失し童子童女の存在も確かではないが、送子観音であると考えられる。

ついでほかの窯での雕塑像の出土を見れば、水堀壠窯では雕塑観音・弥勒・小動物、嶺兜窯では雕塑仏像、後所窯では雕塑など、後所虎頭山郁美窯では雕塑など、後山洋水尾窯では人物雕塑、動物雕塑など、後山洋堀仔窯では動物雕塑など、新寨窯では雕塑など、屈斗宮窯乙跡では雕塑などの資料が出土している。（王羿雲 2011）。いずれの窯跡も碗皿を焼造しており、白磁雕塑のみを専焼することはないようである。さらに雕塑の焼造は地域を異にする離れた窯跡でも行われていた。

### （4）徳化窯以外での白磁観音像の焼造

羽黒山像は、色調がややくすんでおり、徳化の白磁製品とは違う印象を持っていた。関連文献の調査で、漳窯にて同様の白磁観音像の焼造が確認出来た。

#### ① 福建省漳窯の白磁観音

漳窯は、日本で漳州窯と理解されている陶磁器生産地

(華安と南靖の両県の接点、徳化の南約100km・廈門の南約60km)に含まれる。『漳窯』によれば漳窯の名称は清朝光緒十二年(1886年)郭柏蒼が著した『福建産録異』に由来する。東溪窯を主体とし寨仔山窯跡、洪門坑窯跡、東坑庵窯跡、松柏窯跡及び媳婦寮などいくつかの窯跡が存在する。人物造像には如来仏像、持寿桃弥勒仏像、持数珠弥勒仏像、蓮華座観音坐像、持書観音坐像、高髻坐式観音像、寿星像などがある。日用品も焼造している。明代に焼造が始まり(1966年に発見された山東兗州の明代弘治18年(1505)の巨野郡王朱陽蓋墓誌に伴った漳窑白釉米色器蟠螭尊が存在)、清代中期以降に製品の品質が劣悪となり、やがて衰退したという。徳化製品とは大体が似ているが、器物表面に氷裂が現れしつとりとし徳化には及ばないという。

さて、肝心の羽黒山像に似る白磁観音像であるが、高さは22.3cm底径9cmを測る、漳州市博物館所蔵像が紹介されている(図6)。浅い黄色の胎土である。胎土は薄く、焼成はよくない。釉薬面がくすんでいて細い氷裂がみられる。左手に童子を抱き岩座に座り、台座基部からは龍が片手を伸ばし観音の存在を支えているところも同じである。童子の頭部は失われている。三尊形式となるが、脇侍の金童玉女のうち金童が失われている。岩座右側に経箱を置く。成形は型作りであり、閉塞のない底部内面(図7)を観察することが出来る(葉文程主編 呉其生著2002)。比較のため羽黒山像の内部画像を提示しておく(図8)。この白磁観音像は、羽黒山像と瓜二つであり、よって羽黒山像は、徳化窯製品ではなく漳窯の製品であると見られる。前稿を訂正しておきたい。さらに、東博資料のNo.102と108、V&A所蔵の徳化窯観音像(V&A HP vanda-cis-O168404)も画像で見限り漳窯製品の可能性がある。漳窯の白磁雕塑は、明代中葉に始まり、明末清初に衰える。福建博物院所蔵の「釈迦牟尼立像」には嘉靖35年(1557)の紀年があり、「陳福成」名款などの陶工の名が見える(林忠滄ほか2018)。ほとんど徳化窯と同時に白磁雕塑類の焼造が開始されたのであろう。重要なことに衰退は月港の衰退とほとんど同じとなる。生産は輸出港との関係が強かったのであろう。

## ② 南靖窯の福建省漳窯の白磁観音

南靖窯は日本では漳州窯として理解される陶磁器生産地の一部となる。南靖県の東は華安县に隣接し、西は永定県に接し、北は竜岩市に接し、南東はもともと月港の所在地である竜海市(約30km)に接している。



図6 漳窯白磁観音像(漳州市博物館蔵)



図7 漳窯白磁観音像・内部(右側)



図8 出羽三山神社所蔵白磁観音像(筆者撮影)

ここで、清代の白磁観音像が採集されている。型作りであり底部は閉塞され、透気孔が開けられている。左手を垂らし、右手を立膝の上に置く。優雅な面貌をしている。高さは8cmで底面が5.2cm～3.7cmである。このほかに白磁仏像や黒釉の仏像もある（葉文程主編 執行主編欧陽希君 2002）。

紹介できたのは少ないが、徳化窯以外でも白磁観音像の焼成は行われていることに注目すべきである。さらに羽黒山像が漳窯の生産品とすれば、徳化窯以外の製品も日本に輸入されていることになる。白磁観音像すべてが徳化窯という理解に注意が必要である。つぎに生産地の資料などから白磁観音像の生産年代について、もうすこし詳しく整理してみたい。

### 3 白磁観音像の年代

#### (1) 白磁観音像の生産と年代

実は白磁観音像の焼造の年代については、史料、紀年銘資料からいくつかを知ることができる。

##### ① 中国国内での資料

まず白磁彫塑の陶工として名高い人物が幾人かおり、その人物の印が白磁彫塑に刻まれるので活躍年代から、生産年代を想定することが出来る。陳建中氏によれば、明清代の陶工はいくつかの家族に分けることが出来、明代に活躍した何氏家族（何朝宗・何朝春兄弟）・林氏家族（林日盛・林子信・林朝景・林孝宗・林稀宗・林捷陞）。清代に活躍した顔氏家族（顔英助・顔清着）。清代から民国期に活躍した、許氏家族（許良西と子孫）、蘇氏家族（蘇学金ほか）がある。この中でもっとも有名なのは何朝宗である。明代嘉靖（1522～1566）～万暦年間（1573～1615）に活躍し、その彫塑は『泉州府史』には「天下伝品之」と記される。ついで林日盛は明代万暦年間（1573～1615）に出生し活躍した（陳健中ほか 2011）。このほかにも張寿山（何朝宗と同時期）などが知られている（王羿雲 2011）。何朝宗・何朝春の兄弟と林日盛あるいは張寿山の存在からは、16世紀後半から17世紀前半には、観音像などの白磁彫塑が生産され、優品が焼造されていたとみることが出来る。

ついで紀年銘資料であるが、十分史料は集められないのだが、福州の林学春氏の収蔵品である何朝宗の作という水月観音像に、「万曆辛巳何朝宗制」という銘があることから、1581年に作成されたもので（黄傑欽 2013）。16世紀後半となる何朝宗の作品ではないが、河南省新郷市博物館の所蔵する白磁観音（高さ25cm一尊形式）に「天啓年」の銘がある（張雲英 1982）。これは明末の天啓年間（1621～27）である。16世紀後半から17世紀前半代には、白磁観音像が数多く焼造されていたことを示している。

彫塑という視点からすれば、霍吉淑（Jessica Harrison-Hall）氏は、明代1519年正徳年間の墓誌をともなう墓から出土した水盂は、大英博物館所蔵品に類例がある。ついで1559年嘉靖期の墓誌を伴う墓から出土した、神仙と思われる彫塑がある。また1655年のBlacuw's Nieuw 地図には、徳化の白磁観音が描かれた。1696～97年に英国女王メアリ2世が収蔵した大型観音像、そして17世紀の90年代に、ベトナム南部沿岸で沈没した平順号には、観音塑像と神仙像動物像があったとする（霍吉淑ほか 2004）。

白磁碗皿以外の彫塑造形物は16世紀前半には焼造を開始し、やや遅れて、神像など白磁彫塑も16世紀中葉には出現し、白磁送子観音は17世紀半ば以前には、盛んに国外へ輸出されていたということがわかる。では、白磁観音像の日本への輸入年代はどのようなのであろうか。

## 4 日本での徳化窯製品の展開

日本に徳化窯製品が最初に入るのは、おそらく南宋代と思われる。ただし日本の玄関口である博多ではほとんどその製品は見当たらない。可能性のあるものはあるが、存在するとしてもごく少量であるという（田中克子氏ご教示）。11・12世紀から13世紀初めにかけては、大量の福建省白磁が日本に流入し、その輸入港は博多であるが、博多からほとんど見つからないというのである。南宋代の徳化窯製品として、例外的に日本に入るのは、九州地方の鹿児島県霧島市隼人町の小田松木蘭遺跡から出土した徳化窯製品の白磁合子がある（図9）。これは、墓壙からの出土であり、湖州鏡などとともに出土している（重久淳一氏ご教示ご提供）。湖州鏡との共伴とすれば12世紀後半を中心とする年代であろう。



図9 小田松木蘭遺跡・出土徳化窯合子（重久淳一氏撮影・提供）

このあとの時期、元・明代はほとんど日本では出土しない。ついで、17世紀後半の廃棄年代を持つ資料がいくつか江戸遺跡で少量確認されている。興味深いことに清代も後半、18世紀代後半には長崎県長崎市唐人屋敷、出島、東京都の江戸遺跡群で、出土量が多くなっていく。山形にもごくわずかに徳化窯の小碗がもたらされている。

概括すれば、徳化窯製品は12世紀～13世紀初め南宋代にごく少量日本に流入する。その後、元代・明代の出土ほとんどなく、明末清初に少量、清代18世紀になると一定量が入る。しかし沖縄では多いものの、本州では長崎・江戸でも出土するが、拠点の遺跡以外ではあまり見ることがない資料である。ということになる。

さて、肝心の白磁観音像は、いつ頃日本に輸入されたものなのだろうか。マリア観音として知られている像ではあるが、いつ頃日本に輸入されたかはよくわからない。

### (1) 江戸遺跡の徳化窯製品

まず徳化窯製品（明末清初～清朝）と連動し、白磁観音像が輸入される可能性があるのでまず日本各地の遺跡から出土する様相を検証し整理してみたい。

#### ① 江戸遺跡での清朝磁器の出土傾向

この時期日本の政治的中心であり、巨大な消費地でもあった江戸遺跡を見てみよう。堀内秀樹氏によれば、清朝磁器の出土は17世紀末～18世紀前半は少なく、18世紀第4四半期以降に出土例が飛躍的に増大すると整理する（堀内2014）。さらに堀内氏は江戸遺跡の調査事例を踏まえ、中国磁器の出土様相をⅠ段階（～17世紀初頭ころ＜中国磁器で構成される段階＞）、Ⅱ段階（～17世紀前半ころ＜中国磁器と国内産磁器が混在している段階＞）、Ⅲ段階（17世紀後葉～＜ほぼ国内産磁器で占められる段階＞）、さらにⅢ段階を二つに分け、Ⅲa段階（17世紀後半～18世紀前半＜中国磁器がほぼ認められない段階＞）、Ⅲb段階（18世紀後半＜特定の機種に中国磁器が認められる段階＞）に分けることが出来るとする。Ⅲa段階では、まったく存在しないというのではなく、「貿易陶磁器を入手できる個別のパイプ」が存在していた場所では出土するものの、これらを除いてほぼ確認できないという（堀内2017）。

さて、以上をふまえて江戸遺跡の徳化窯製品の出土状況を見てみよう。近世貿易陶磁器調査研究

グループによる江戸遺跡の貿易陶磁器集成（2010～15年度刊行江戸遺跡発掘調査報告書集成）を参考とすれば、集成された1260件の貿易陶磁器のうち、徳化窯製品は49件である。大半は色絵であり、青花は少なく、小考で注目する白磁製品は8件とさらに少ない。一例のみ皿があるが、残り口縁部が外反する小碗がほとんどで、直口の小碗が一点ある。推定廃棄年代は、皿が17世紀第3四半期であるが、碗は、直口の小碗が18世紀第2・3四半期、外反する小碗は19世紀第1・2四半期のものが多い（近世貿易陶磁器調査・研究グループ2021）。おそらく小碗は19世紀代の煎茶碗であろう。山形市内の旧家にも、型絵でボタンを描いた青花碗が伝世されている。これは煎茶碗であると考えられる。碗を伝えた細谷家は江戸期には京都と山形に2拠点を構え、京都では医者として活躍していたので、京都での入手を考える必要もある（山口2017）。

また、江戸遺跡のうちの千駄ヶ谷五丁目遺跡では、有名な徳化窯の製品である、白磁杯に梅花の貼花を持つ梅花杯（図5）が出土し、17世紀の第4四半期が廃棄年代とされる（堀内1999）。加えれば、白磁梅花杯は徳化窯製品を代表する産品であった。明治41年の日本国農商務省商工局の『清国窯業調査報告書』には「白磁梅花浮模碗（直径四寸二三分高一寸九分）」が記され「十個で約六五銭（当時日本通貨）」とある。そもそも梅花杯は徳化地区の伝説がともなう特別のブランドであった。陳建中氏の解説を概略すれば「昔むかし徳化には、梅を愛する「梅翁」と呼ばれている老人がいた。夫婦で仲睦まじく暮らしていたが、子供がいないのが気がかりであった。ある夜夫婦は仙女が歌う同じ夢を見た。その歌詞の頭を繋げると「梅開得好」となった。好は「女子」のことである。翌年梅の花の盛りのころ梅翁夫婦は女の子を得、「梅雪」と名付けた。梅雪は利発で美しい女性に成長した。やがて婚礼のころを迎え、梅翁は娘の願いを聞き入れ、結婚を申し込む青年に結婚を受け入れる条件を示した。梅の花を配した美しい磁器を作ることであった。当日、青年たちはたくさんの作品を持ち寄って集まった。その中に瑤台村の蘇という青年がおり、彼は枝の上に梅の花を貼り付けた杯を作ってきた。梅雪への思いが伝わり、梅翁の一家はたいそう気に入り結婚を許した。こうして作られた梅花杯は、徳化の人々の梅花に寄せる思いがこもったものであり、明代徳化陶磁器の代表例となった」（陳建中ほか2011）。徳化を代表する造形が梅花杯であり、西欧や新世界へも展開する徳化窯を代表する作例であった。

さて、以上からすれば、江戸遺跡の徳化窯製品の出土は、廃棄年代からすれば17世紀後半代と18世紀後半以降の2時期が注目されることになる。しかしながらその中には白磁観音像は含まれていない。次に長崎の様相を管見の限りではあるが見てみたい。

## ② 長崎の徳化窯白磁観音像出土例

この時期日本対外移出輸入の玄関口であった長崎では、陶磁器は中国からの重要な移入品であった（寥赤陽1999）。しかしながら、白磁観音像の出土は少ない。

長崎での清朝磁器と徳化窯製品の出土様相については、扇浦正義氏の研究がある。扇浦氏によれば、明末期の中国陶磁に比べると、清朝陶磁の出土は少なく、17世紀後半～19世紀には肥前陶磁が主体であり、清朝磁器の出土量は1割以下であり、18世紀後半以降になると、やや増加する傾向にあるという。また、徳化窯系磁器の器種は小杯、小碗、小皿、合子などの飲食具が主体であり、18世紀後半以降になると色絵小碗の出土が多くなるとする（扇浦1999）。重要なことに扇浦氏は、長崎市の徳化窯白磁観音像の破片の出土を報告している。頭部と膝下さらに左右手首を欠失する資料であり、慈母観音像であると整理している（扇浦2017）。資料の法量など詳細はよくわからないのだが、画像の破片から推定すれば、岩座に坐し、胸元の右手に童子を抱き、脇侍の童子・童女を伴わない。第2型の一尊の送子観音像であると考えられる。大昌寺像と共通する作例であろう。管見の限りと

はなるが、出土例は一例のみである。さて、小田木富慈美氏の研究によれば、長崎では、玩具器物や仏像が輸入停止や所持禁止の対象となっていた。

小田木富慈美氏は江戸時代の長崎における清朝磁器全体の輸入傾向を整理している。永積洋子氏の『唐船輸出入品数量一覧』の欠損年などを関連資料から捕捉し丁寧に実態を復元している。まず「現在まで管見にある史料を見る限りでは、寛文～元禄年間（1661～1703）のほぼ30年間にわたり、陶磁器の輸入は認められていなかった」と整理する。密輸（海中に沈める、定高を越えた分の市中販売など）も想定されるがわずかである。清朝の海禁政策と幕府の出した輸入停止措置が加わり、17世紀後半に日本国内の中国陶磁器の流通量は激減すると見る（小田木 2021）。

さて、白磁観音像とのかかわりで注目したいのは、寛文8年（1668）には「徳利、茶碗鉢皿、玩具器物（焼物）ほか」が輸入停止になっていることである。「玩具器物」の輸入停止については、史料をほかに7件ほど挙げている。さて、この玩具器物類の中に白磁観音像が含まれ、キリシタン関係資料とみなされた故に輸入停止となった可能性はなからうか。さらに小田木氏の上げた、寛文8年を含む史料『長崎記』には、仏像ほか「右は唐人船中并日本逗留中ノ内持用不仕候而不叶道具也」と記されている。この仏像は白磁観音像を含むかもしれない。直接史料に当たれないが、この時期に輸入停止あるいは所持禁止とされたものに仏像と玩具器物があることには注目しておきたい。白磁観音像が長崎に入ることが可能であったのは寛文8年以前であったのかも知れない。

### ③ 清朝磁器の輸入ルート

渡辺芳郎氏は近世日本の対外への接点とでもいうべき境界領域を、対馬・松前・薩摩そして長崎に見出す。このいずれもが最終的には巨大な消費地である、江戸へと結びつく（渡辺 2021）。堀内秀樹氏は「清朝陶磁器の日本への流入ルートは、長崎を経由した景德鎮窯系の製品を中心としたものと沖縄を経由した中国南部の製品を中心とした二つのルートの存在が想定できる。江戸をはじめ本州の各消費遺跡からは景德鎮窯系の製品が多くみられ、日本のほとんどの地域は長崎ルートが主たる経路であると言えるだろう。」と整理する（堀内 2017）。この後も、江戸へ入る清朝陶磁器の主たる窓口は長崎であったと推定している（堀内 2021）。もっとも長崎と江戸の清朝磁器の様相は差異がある。弦本美奈子氏は長崎に入ってきたもののうち選択を経て江戸に運ばれたとする。長崎には幅広い品物が入り、このうちから江戸の需要にこたえるものが選択されたと整理している（弦本 2014）。

ただ、大阪府の事例は少し異なっている。大阪伊丹郷町の清朝磁器の出土について、赤松和佳氏は「17世紀末期から18世紀初頭の伊丹は、主幹産業である酒造業が第1ピークを迎えている。（中略）経済力の高い屋敷地では国産の陶磁器ではなく、最新の清朝磁器を含む中国磁器の食膳具を主体」に使用できたとする（赤松 2022）。地域的・社会的に清朝磁器の入手には違いがあるのかもしれない。留意すべきことと考える。ただ山形などの近世遺跡からの清朝磁器の出土様相、あるいは伝世状況は江戸遺跡と近いと考えている。

大きな傾向性としては、近世の陶磁器流通の巨大な窓口は長崎となる。白磁観音像もここへ入ったとみるのが考えやすい。出土資料も存在する。当然、密貿易や琉球から薩摩という経路、潜伏キリシタンが独自の流通ルートを持っていた可能性（台湾鄭成功の関係者にはキリスト教徒が存在など）も考えられるだろうが、この詳細はなかなか把握できない。長崎へ入った清朝磁器は、巨大な消費地である江戸へと運ばれるが、白磁観音像は江戸では出土しない。長崎で選択（輸入停止あるいは所持禁止など）が働いたのかもしれない。

以上から推測すれば、徳化窯の白磁観音像は、日本国内の徳化窯製品の流通を清朝磁器の流通と関連させて考えた場合、碗・皿などの一般的な器物がもたらされる18世紀後半より以前、17世紀前

～中期にもたらされた可能性を考えてみたい。

興味深いことに、徳化窯では白磁製品が焼造され、仏教や道教あるいはキリスト教に関わる造形の制作も盛んに行われたのだが、日本の発掘調査では白磁雕塑などは遺跡からはほとんど出土しない（白磁観音像破片が1例）のである。西欧や新世界で、中国白（Blanc de China、ブラン・シノ）としてもはやされた、白磁雕塑を含む徳化窯製品は、日本にほとんど入らない。わずかに例外が白磁観音像であったのである。

さて、羽黒山像と大昌寺像いずれもがマリア観音と呼ばれていた。マリア観音像としての白磁観音像について、管見の範囲とはなるがいくつか整理してみたい。

## 5 マリア観音としての白磁観音像

マリア観音（マリヤ観音）という用語はそう古いものではない。若桑みどり氏は先行研究を整理しつつ、「[マリア観音]という名称は、切支丹遺品研究の先覚者永山時英氏が、1925（大正14年）に刊行した『切支丹史料集』のなかで、東京帝室博物館蔵の像を「マリア観音」と書いたのが始めであろうとする。さらに「[マリア観音]という名称が、近代の学者の命名であり、切支丹信者のものではないという事実は、非常に重要である」と指摘する（若桑20083）。宮川由衣氏は、白磁観音像がマリア観音と称されるのは1920年ごろからであると、先行研究を整理する（宮川2021）。この時期は南蛮美術が日本で評価され始めた時期とも重なる。芥川龍之介は、大正9年（1920）の「黒衣の聖母」（青空文庫 HP）には「麻利耶観音と称するのは、切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢聖母麻利耶の代りに礼拝した、多くは白磁観音像である。」とし、黒檀を刻んだ一尺ばかりの黒衣聖母像にまつわる怪異譚を描く。昭和2年（1927）「わが家の古玩」（青空文庫 HP）の中で「一体のマリア観音を蔵」していることを記している。

さてこれ以前の名称が気になるところとなる。宮川氏はマリア観音とされる、以前の名称について「キリシタンたちは、聖母マリアに由来する「ハンタマルヤ」と呼び、信仰生活の中で先祖代々受け継いできた。」とする（宮川2021）。白磁観音像は基督教禁教期に日本にもたらされ、「ハンタマルヤ」という呼び名が存在した。東京国立博物館（東博）所蔵資料は安政5年（1858）の没収品が主であり、この時点で「ハンタマルヤ」と呼ばれるものがあったことがわかる。「ハンタマルヤ」は聖母マリアである。その後、東博所蔵資料などの評価からマリア観音という名称が、近代の学者の命名により20世紀、大正時代以降に生まれたとなる。つぎに重要な東博所蔵資料に注目してみたい。

### (1) 東博所蔵資料

資料の大多数は安政3年（1856）の没収品であり、一括性があるとともに上限年代を知ることが出来る（東京国立博物館2002）。キリシタンの所持品であったことなどが判明し、採集地や年代もわかるものが含まれている。『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』で様相を知ることが出来る貴重なものである。

#### ① 東博資料の伝来と種類

資料は明治12年（1879）に内務省社寺局から引き継いだ、旧長崎県保管の信徒からの没収品である。絵画（銅板油彩等）、彫像（マリア観音およびその他の仏像を含む）、十字架・ロザリオ・ロザオ金具、銅牌、メダイ、参考資料（祈禱書・守裂・遺物函・巾着・貨幣等）にわたる。安政3年没収資料は、現在の長崎市の浦上地区で安政3年に起きた隠れキリシタンの摘発事件である浦上三番

崩れの時の没収品である。

白磁観音像のうちマリア観音として掲出されているのは37点、ほかに残欠資料が23点である。また観音菩薩立像(3点)、観音菩薩坐像(20点)、このほかに仏像・神像、人物像、置物が掲出されている。中には三尊形式の送子観音像の脇侍が独立し、童子像として数えられているものも含まれている。観音像とされる資料に送子観音が4点(陶磁器2点・滑石2点)ある。陶磁器製は17~20cm(7寸)程度、滑石製は12cm(4寸)程度である。

さて種類だが若桑みどり氏の分類に従い、マリア観音と表示されている資料を分ければ、第1型が14点、第2型が2点、第3型が21点となる。第3型が多く、ついで第1型、非常に少ないのは第2型となる。第3型が多い。なお、残欠資料には、第3型脇侍の金童玉女と考えられる資料が存在するので、さらに多く伝わっていたのであろう。

次いで観音像の高さだが、第1型には①大型40cm~30cm程度の資料が4点、②中型23cm程度の資料が2点、③小型12cm程度の資料が8点ある。第2型の2点はいずれも20cm程度。第3型①大型36cm程度のものが2点、②中型20cm程度のものが19点となる。

マリア観音の高さに注目すれば(1尺約30~32cm程度とすれば)、第1型の一尊像は、①大型1尺~1尺3寸程度、②中型7寸程度、③小型3寸程度のものが存在する。第2型は7寸程度。第3型は①大型1尺3寸程度、②中型7寸程度の資料が存在することになる。大まかには大型(1尺前後か超え)・中型(7寸前後)・小型(3寸前後)の3種があると見ておきたい。Nassau商船(廈門から1699年英国へ戻った船で「Sancta Marias」175点を積んでいた)にはサイズ表記がないものと「smaller」とあらわされるものあり、大型とそれ以外という2種の分け方がある。英国ヴィクトリア&アルバート博物館(以下V&A)資料には、HP閲覧で大きさが30cmを超える大型の白磁観音像と22~4cm程度2種の資料があり、後者のサイズが「smaller」となるのかもしれない。

資料の年代であるが、解説には明~清17世紀徳化窯と記される資料と、清17~18世紀と記される資料、新古2段階がある。このほかの資料には19世紀代のものがあることから、17世紀を中心とした一群と18世紀から19世紀を中心とした一群の、2段階に分けて、資料の上限年代である安政3年までに資料が蓄積された可能性がある。先に見た清朝磁器の輸入年代を想起させる。マリア観音とされる白磁観音像の資料は、ほとんどが明~清17世紀と年代が示され、前半段階の年代となる。

さて、第1型大型の一尊像には作行きが素晴らしいものがある。東博像83は右手を欠失するものの、頭髪を柔らかにまとめ、左下に視線を落としつつ、風が袖を揺する中、波濤にすくと立つさまを表しており見事である。明代後期の徳化窯の名工、何朝宗の作品(「渡海観音像」泉州海外交通史博物館(陳健中2011))を思い起こさせる。両者の像容は異なるが、胸元の連珠に結ぶ蓮華を模した瓔珞の表現は共通し、1尺を超える高さも共通する。なお、この東博像83は高さ41.5cm。安政3年長崎奉行所に収納された長崎奉行所旧蔵品であり、原所有者は中野郷吉蔵であることが判明している。さらに吉蔵の口述に「先祖共より持伝信仰いたし来候『ハンタマルヤ』と申す白焼仏立像一体」とある。この像はハンタマルヤと呼ばれ、伝来したものであったことが知られている(東博2002)。後に触れるが、Nassau商船には「Sancta Marias」と「women with children」が積載され、これは聖母マリア像と三尊形式の送子観音像にあたるという。一尊像白磁観音像が子供を抱く送子観音と区別され「Sancta Marias」と呼ばれていたのであり、東博像83の一尊白磁観音立像がハンタマルヤと呼ばれていたことと共通する。たしかに東博像83の一尊像の白磁観音像の高潔さは、聖母マリアと通じるのかもしれない。日本では白磁彫塑のうち、白磁観音像だけが存在するようであるが、日本以外ではどうなっているのだろうか。

## 6 中国国外の白磁雕塑

### (1) 西欧と新世界の白磁観音像の受容

西欧と新世界でも徳化窯の白磁雕塑が確認されている。甘淑美 (Teresa Canepa) 氏は、17 世紀末～18 世紀初の西欧への輸出と、英国と新世界の出土・収蔵状況を整理している。

まずオランダ貿易であるが、まず 1637 年に亡くなったオランダ人の画家 Jan Blass の財産リストに白磁の White Lion がある。白磁観音像が最初に出てくるのは 1655 年の Blacuw's Nieuw 地図 (送子観音の三尊像) である。南アフリカのケープタウンで沈没した Oosterland, Bennebroek, gldernalsen の 3 艘の沈没船にはオランダ向けの徳化製品が積載されていた。このうち、Oosterland 商船は Amsterdam Chanber の商船であり、1697 年に Table Bay で沈没したもので、徳化の仏獅燭台と観音像が出水している。1690 年ベトナム沖 Vung Tau 沈没船と同様である。

ついで、英国貿易であるが、徳化白磁の貿易では、英国はポルトガルやオランダよりも活発で、17 世紀末から 18 世紀初頭という、日本では清朝磁器をほとんど輸入しなかった時期に徳化白磁を大量に輸入した。雕塑が好まれ、英国東インド会社 (East India Company) の貿易リストでは、英国が輸入した徳化白磁は人物や動物塑像が中心であった。記録は 17 世紀末にさかのぼる。英国は厦門 (図 10) を通商港とし、1697 年に Nassau 商船が厦門に出航し、大量の塑像を載せて 1699 年に英国に戻りロンドンで転



図 10 厦門風景 (高桑登氏撮影・提供)

売した。これらの造形は宣教師が提供した象牙や木彫りの塑像を原本として模倣した可能性が高く、175 点のサンクタ・マリア (Sancta Marias) 塑像 (39 点大、67 点小、69 点白) が含まれる。ついで Nassau 商船の商品の中に「70 women with children」(70 件の女性と子供)「71 women smaller」(71 件の小さな女子像)、「37 large white lyons」(37 件の大白獅子)、「1247 small white lyons」(1247 件の白獅子) も含まれている。このうち「70 women with children」は、徳化白磁送子観音を指す可能性を指摘する。送子観音はヨーロッパ文化の象徴である聖母子像に似ていることから、ヨーロッパ人に歓迎された可能性があるという。

Dorrill 商船も厦門から「4200 white chocolate cups」(4200 個の白釉チョコレートカップ)、52 体の「Sancta Marias」(聖母マリア) 像、42 件の「woman each with a child」(女性と子供) を搬入し 1702 年に販売している。1701 年冬に厦門に向かった Dashwood 商船の船荷リストには、「White mugs」(白磁把付杯)、「Women with children」(女性と子供) 像と「Sancta Maria」像が記録されている。ついで「Sancta Maria」像の記録は、1703 年に厦門に到着した Union 商船に「2 Sancta Maria」がある。このほかには 1707 年 6 月に競売にかけられた Soners 商船の陶磁器には、「2 Women with children」[3 Women with children smaller]「3 Sancta Maria」などが見えるという。

さらに、「Women with children」(女性と子供) について、英国デヴォン郡に所領を持った William Cavendish (3rd Earl of Devonshire (1617～1684)) の財産目録に「Two large white figures with children in their laps」(大きな二つの大腿に赤ん坊がいる人物像) が載り、これは今に残る一対の送子観音坐像のことだろうという (甘淑美 2012)。送子観音と聖母マリアは

区別されているのである。1690年代にベトナム沖で沈没した、Vung Tau 商船の報告書には8体の送子観音像が掲出されている。いずれも岩座に坐し左手で子供を抱く像であり、脇侍は伴わない。大きさは13.5cmほどで、同形同大である(Christiaan J. A. Jorg & Michael Flecher 2001)。徳化窯製品はイギリス以外の国々にも広く愛好され、17世紀末～18世紀初頭の西欧に広がったのである。この時期の日本の輸入状況と違っている。

さて、いくつか注目しなくてはならないことがある。甘淑美氏(Teresa Canepa)の取り上げた資料によれば、西欧で白磁観音像が盛んに登場するのは17世紀末から18世紀初頭であり、徳化白磁を大量に輸入した時期に重なる(甘淑美 2012)。大きくは17世紀前半までには、白磁獅子像あるいは大英博物館の神仙像(水盂もか)が輸入され、おそらく白磁観音像も輸入された。17世紀半ばごろに白磁観音像が地図(1655年 Blacuw's Nieuw 地図)に描かれ、像容からは送子観音の三尊像であるとわかる。英国東インド会社(East India Company)の貿易リストでは、英国が輸入した徳化白磁は人物や動物塑像は中心であり、この中には白磁獅子像や観音像が含まれていたこともわかる。17世紀後半から18世紀初頭とくに1700年前後には記録が多く残る。

ついで、こののちの時代を含めて、甘淑美氏は次のように整理している。17世紀末、18世紀初頭の徳化白磁は、ヨーロッパ大陸(英国、ドイツ、オランダ、スペイン、フランス、イタリア)、スカンジナビア(デンマーク、スウェーデン)の王室貴族へと受容され、量も多い。さらに新世界でも17世紀末にアメリカの東部ニューヨークに住んでいたオランダ植民者と、18世紀初めに北東部ニューイングランドと南東部サウスカロライナ州に定住していた英国植民者が徳化白磁のコレクションを持っていた。ついでメキシコ、カリブ海地域の英国、オランダ、フランスの植民地にも広がった。これはスペイン人の太平洋貿易と大西洋貿易によるところが大きい。特にメキシコシティの発掘では新スペイン総督の管轄地域である、旧市街地 Zocalo 区から16～18世紀の中国あるいは日本の磁器が発掘され、完全または半完全な徳化白磁と大量の磁器片(梅花杯など)が出土した。この中には徳化窯の修道士像破片もある。

しかし18世紀半ばになると、ヨーロッパと新世界の徳化白磁の貿易は停止した。欧州では華やかな彩色磁器がもてはやされるようになり、次第に徳化白磁に対する需要が減少したのである。のち徳化白磁は19世紀末に再び生産され、輸出されるようになった(甘淑美 2014)。新世界に徳化窯製品が広がるのはスペイン人の貿易によるところが大きいという。ただし、西欧に徳化窯雕塑が広がるのは、オランダそして英国の貿易が大きい。

## (2) 観音像の中国国外への輸送

観音像を焼造した徳化窯は先述のとおり北東の福州、南東の廈門が外港であった。ほかに観音像を焼造した東溪窯と南靖窯は南東の月港(図11)が近く、その先には廈門がある。

杜瑜氏によれば、宋元時代に形成された広州、泉州、明州の三大港は、海上シルクロードの起点で対外貿易の大港であり政府の管理下にあった、元末に泉州港が急激に衰退、明成化十年(1474年)市舶司を福州に移した。後に福州は琉球が往来する唯一の港として指定された。



図 11 月港風景(筆者撮影)

廈門港は九龍江が入海する箇所に位置する島である。水深が深く13世紀以来東南沿海の重要港となった。正徳11年(1516)ポルトガル商船が初めて廈門来港。嘉靖26年(1547)スペイン商船廈門来港。同時にフィリピンのマニラと毎年3~40隻の船が往来し、この航路はメキシコへと結んだ。さらに台湾と琉球さらに日本への航路を開拓し、その後アモイー長崎への直行航路に発展した。康熙22年(1683)に海禁を撤廃し、廈門港は空前の発展を見せた。康熙56年(1717)に再び海禁されたが、雍正5年(1727)に解禁された。以降廈門港は福建省の対外貿易の唯一の窓口となった(杜瑜1997)。スペインは1568年フィリピンを占領し、1571年にマニラに拠点を構える。

陳自強氏によれば、月港は正統景泰年間(1436)に始まり、明代正徳・嘉靖年間(1506~1566)に福建省最大の民間海外貿易港として発展した。ついで隆慶元年(1567)に明政府は局部的に海禁を開放し、月港に「洋市」を設置し東西洋貿易を許可した。以来、月港の海外交通貿易は繁栄し、万暦年間(1573~1620)は全盛となった。中国とフィリピン島の交通貿易は月港が首位を占めることとなった。しかしながら明末清初の動乱とオランダなど植民地主義勢力の侵入により、天啓年間(1621~1626)には月港は衰退に向かった。崇禎6年(1633)に「洋市」が閉鎖された(陳自強1983)。月港から輸出されたものには陶磁器がある。漳州東溪窯で生産された、主に観音仏像、弥勒菩薩、香炉花瓶、筆筒水盂など白磁雕は月港を通じて東南アジア諸国に輸送されている(杜瑜1997)。

最初は国際港として元代までは泉州が優勢であったが、のちに明末に月港が優勢となり、明末清初になると廈門が優勢となり、のちには廈門が国際港として発展してゆく。陶磁器は16世紀~17世紀初頭には、月港が輸出港として優勢であった。甘氏の整理のように17世紀後半からは廈門が盛んになってゆくのであった。大きな港湾の周辺には輸出用の商品を焼く窯が設けられる。おそらく月港の輸出に関連して盛んに商品を生産したのが、南靖窯や東溪窯なのであろう。そして廈門と福州に深く関係しているのが徳化窯と考えられる。

## まとめにかえて

山形県鶴岡市に伝わる2体の白磁観音像(羽黒山像・大昌寺像)は、マリア観音として知られ、日本にあるマリア観音の類型に収まるものであった。しかしながら、キリスト教信仰に関係するという理解は、近代を遡ることはできなかった。羽黒山像は観音霊場である羽黒山に伝わり、大昌寺像は地藏堂にあったということからすれば、観音信仰にかかわる仏像という理解も重要であると考えなくてはならない。

### (1) 送子観音像としての羽黒山像・大昌寺像

日本国内の磁器製観音像の様相であるが、元代白磁観音像の出土事例が石川県白山平泉寺旧境内にある。元代青磁の伝世品としては神奈川県鎌倉市建長寺「青磁観音菩薩及両脇侍像」がある(鎌倉歴史文化交流館2020)。このほかにも出土例があるので、元代には日本にある程度の量の磁器製観音像は伝えられていたことがわかる。また、韓国木浦沖で引き揚げられた、元代末の新安沈船の積載品の中に、観音像(青白磁菩薩像)がある(韓国文化広報部・文化財管理局1985『新安海底遺物 資料編Ⅲ』P226)。また、観音とは表記されていないが、青白磁や褐釉の雕塑像もいくつか掲出している(韓国国家海洋博物館2006『新安船』P154)。新安船は目的地が日本であったことはよく知られている。盛んに白磁観音像が移入されるのは、明末から清代のはじめで、羽黒山像・大昌寺像は

この時期に当たる。

羽黒山像・大昌寺像は中国福建省徳化窯などで焼造された、送子観音像である。送子観音は現在も盛んに信仰されている。この信仰は当初は鬼子母に連なるものであったが、中国で鬼子母を送子観音と呼ぶのは早くは宋代にある。日本、韓国ともおそらく12世紀代にはその信仰が伝わっている。送子観音造形と信仰は明代に盛んになるものの、日本でこの信仰を受け入れる素地は、古くから形成されていたことがわかる。

送子観音像が中国で生産された時点で、聖母マリアとされていたのかどうか。これはよくわからない。徳化では甲杯山窯で聖母マリアあるいはキリスト像という、キリスト教信仰に直接結びつく造形が焼造され、これらは西欧で現在に伝えられていることからすれば、何らかのつながりはあるのだろう。管見の範囲では、マリア観音像として知られる日本に伝わる白磁観音像が、当初からキリスト教信仰に基づいて作られたのかどうかについて、いくつかの見解を知ることが出来た。張金穎氏は、徳化窯の送子観音は日本にも輸出され、日本のカトリック教徒は幕府禁教の取り調べを避け、観音像をマリア観音として信仰したとみる（張金穎 2022）。陳穎艶氏は、キリスト教が迫害された幕府時代の日本では、「Kakure Kirishitan」と呼ばれる、信仰を隠した日本人キリスト教徒は、心中で敬礼する聖母子の代わりに送子観音像を祀ることを選択したとみる（陳穎艶 2017）。いずれもが本来観音像であるものが、日本禁教下にマリア像として信仰されたとしている。『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』に、マリア観音「名称はもとより正式のものではなく、中国南部で子供を育てる守り神として崇拜され、福建省の徳化窯などで数多くつくられて日本にも輸出されたこの種の観音像が、やがて信徒の聖母子への夢を託すよすがになったものといえよう」とするのと通じる（東博 2002）。

日本に輸入される白磁観音像の型式は、羽黒山像に連なる三尊形式の送子観音像が最も多い。大昌寺像の立膝で子供を抱くものは少ない。また西欧の記録からすれば、白磁観音像、「Sancta Marias」と「women with children」いう2者が区別して記録されている。「Sancta Marias」は聖母マリア像であり、「women with children」はWilliam Cavendishの財産目録に記されると思われる資料が現存していることから、送子観音であることがわかる。つまり聖母マリア像と送子観音とは別に認識されて、送子観音はヨーロッパ文化の象徴である聖母子像に似ていることから、ヨーロッパ人に歓迎された可能性があるという。聖母マリアは聖像、送子観音はそれに類似した装飾品という理解が存在した可能性があるり、羽黒山像は「women with children」となるのであろう。

## (2) 羽黒山像・大昌寺像の生産と輸入時期

中国では、白磁観音像の生産が盛んであった。特に代表的な生産窯が徳化窯である。さらにこの周辺の窯でも生産が行われた。羽黒山像は漳窯産品に類品を知ることが出来た。白磁観音像すべてが徳化窯という理解に注意が必要であることになる。漳窯は月港と関連が深く、徳化窯は福州港あるいは厦門港と関連が深い。羽黒山像は明末清初に日本に大量に輸入される、漳州窯の製品とともに日本へと輸入されたのであろう。その時期は、天啓年間（1621～1626）以前が月港の主要時期とすれば、17世紀の前半でも半ば以前となるのであろう。

大昌寺像は徳化窯の生産品とみられる。この輸入時期は17世紀の前半段階と考えておきたい。その理由であるが、日本各地の遺跡から出土する徳化窯製品の様相が参考となろう。江戸遺跡の徳化窯製品の出土は、廃棄年代からすれば17世紀後半代と18世紀後半以降の2時期が目され、これらの製品は長崎に輸入されたものが伝えられたのであった。長崎では、寛文8年（1668）には「徳利、

茶碗鉢皿、玩具器物（焼物）ほか」が輸入停止となり、唐人所持の仏像までもが所持できないとなっている。玩具器物・仏像に送子観音像が含まれるとすれば、これらはキリスト教信仰禁止措置の一環と考えることもできる。17世紀半ばは潜伏キリシタンの集団露見事件（郡崩れ）が発生し、宗門改め制度と宗門人別帳が成立する時代にもあたる。17世紀半ばに大きな変化があり、江戸遺跡の事例も17世紀後半に廃棄されたとすれば、輸入された年代は17世紀半ば以前と考えてみたい。

日本に入る白磁観音像の様相についてはいくつか提示することが出来た。西欧での白磁観音像の受容と展開、さらには南海観音としての白磁観音三尊像の位置づけについては、資料を集めたが盛り込むことが出来なかったので後考を期したい。

最後になるが、中国語・韓国語の文献収集は**성서영**氏の助力を得た。中国語文献の収集については、**范佳楠**氏と**李凱**氏のご協力を得た。出羽三山神社、出羽三山歴史博物館学芸員渡部幸氏、大昌寺ご住職富樫晃悦師からは資料の熟覧と掲載についてご高配を賜った。原千夏氏からは調査画像と文献の提供を得た。謝明良氏と堀内秀樹氏からは文献の提供と貴重なご助言を受けた。重久淳一氏、高桑登氏、館内魁生氏、田中克子氏、陳建中氏、八重樫忠郎氏、湯澤丈氏、四日市康博氏からは貴重なご助言と資料提供を得た。厚くお礼を申し上げる。

#### 参考・引用文献（アルファベット順）

- ・赤松和佳 2022 「畿内における陶磁器の諸様相」『消費地遺跡における近世陶磁器研究の可能性 発表要旨』考古学研究会 第58回東京例会 P35～44
- ・曾凡 2001 「清代的福建瓷器」『福建陶瓷考古概論』182～188
- ・Chritiaan J.A. Jorg & Miichael Flecher 2001 「Porcelain from the Vung Tau Wreck: The Hallstom Excavation. Sun Tree」 P85～86
- ・沈薇薇 2011 「マリア観音と天草の隠れキリシタン信仰—サンタ・マリア館所蔵資料を中心に—」『周縁の文化交渉学シリーズ2 『天草諸島の文化交渉研究』』関西大学
- ・陳穎艶 2017 「東渡日本の徳化窯「瑪利亜観音像」」『文物鑑定与鑑賞』2017年第10期 P32～34
- ・陳健中・陳麗華・陳麗芳 2011 『中国徳化史』上海交通大学出版社 243P
- ・陳自強 1983 「論明代漳州月港の歴史地位」『海交史研究』1983年第1期 P90～97
- ・出羽三山歴史博物館編 1975 『出羽三山歴史博物館蔵佐藤仏像コレクション解説』 P24
- ・杜瑜 1997 「明清時期潮、汕、漳、厦港口的发展及其局限」『海交史研究』1997年第2期 P6～20
- ・甘淑美（英国）2012 「17世紀末～18世紀初歐洲及新世界的徳化白瓷貿易（第一部分）」『福建文博』2012年第四期 P2～14
- ・甘淑美（英国）Eladio Terreros Espinosa（メキシコ）2014 「17世紀末～18世紀初歐洲及新世界的徳化白瓷貿易（第二部分）」『福建文博』2014年第3期 P2～14
- ・国家文物局水下文化遺産保護中心ほか 2017 「第6章結語」『南海1号沈船考古報告之一 —1989～2004年調査』下 P624～627
- ・原千夏 2021 「潜伏キリシタン遺物白磁製マリア観音像の制作地と輸入経路について」『三島海雲記念財団研究報告書』58 P1～6
- ・黄傑欽 2013 「從紀年看何朝宗瓷塑作品的年代与風格」『福建文博』第4期 P88～90
- ・霍吉淑（英・大英博物館）・王芳 翻訳 2004 「談明代徳化窯瓷器」『福建文博』2004年第4期 P14～17
- ・堀内秀樹 1999 「江戸遺跡出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』No.19 P1～22
- ・堀内秀樹 2014 「『近世都市江戸の貿易陶磁』の視点」『貿易陶磁研究』No.34 P26～30

- ・堀内秀樹 2017 「日本における明清の中国磁器」『第7回近世陶磁研究会資料』P142～169
- ・堀内秀樹 2021 「第8章江戸時代の貿易陶磁器需要—江戸の状況を中心として—」『近世国家境界域「四つ口」における物資流通の比較考古学的研究』P74～86
- ・近世貿易陶磁器調査・研究グループ 2021 『近世都市江戸の貿易陶磁器 資料集(2)』
- ・廖赤陽 1999 「華商のネットワークと長崎陶磁貿易」『貿易陶磁研究』No.19 P85～96
- ・栗建安 2004 「徳化甲杯山明代窯跡の発掘と収獲」『福建文博』2004年第四期 P26～32
- ・鎌倉歴史文化交流館 2020 『中国陶磁—青磁・白磁への憧れ』P58～61
- ・韓国文化広報部・文化財管理局 1985 『新安海底遺物 資料編Ⅲ』P226
- ・韓国国家海洋博物館 2004 『新安船』P154
- ・林忠塗・林元平 2018 「漳窯若干紀年瓷器小考」『海絲・東溪窯国際学術検討会論文集』P68～72
- ・宮川由衣 2020 「サンクタ・マリアとしての白磁製観音像—潜伏キリシタン伝来の「マリア観音」をめぐる」『西南学院大学博物館研究紀要』第8号 P29～39
- ・宮川由衣 2021 「キリシタン伝来のマリア観音の源流をめぐる—中国における聖母像の伝来とその変容—」『西南学院大学博物館研究紀要』第9号 P23～38
- ・農商務省商工局 1908 『清国窯業調査報告書』
- ・小田木富慈美 2021 「江戸時代の対外貿易制限下における中国産磁器の輸入について—文献資料の数量的検討より—」『貿易陶磁研究』No.41 P23～46
- ・扇浦正義 1999 「長崎出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』No.19 P23～37
- ・扇浦正義 2017 「長崎出土の中国磁器と国内流通」『日本における明清の中国磁器』第7回近世陶磁研究会 P82～127
- ・戸川安章 1996 「羽黒山と修験道」『羽黒町史別巻』P486
- ・弦本美奈子 2014 「鎖国期日本への中国陶磁の流通」『東京大学考古学研究室紀要』第28号 P131～158
- ・東京国立博物館編 2002 『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』
- ・東洋文庫 136P
- ・上田恭輔 1929 『支那陶磁の時代的研究』P205
- ・若桑みどり 2008 「第九章 聖母像の変容—マリア観音」『聖母像の到来』P333～383
- ・王羿雲 2011 『明清時期徳化白瓷瓷塑研究』復旦大学硕士学位论文論文
- ・渡辺芳郎 2021 『近世国家境界域「四つ口」における物資流通の比較考古学的研究』
- ・謝明良 2012 「鬼子母在中國—從考古資料探索其圖像的起源與變遷」『陶瓷手記』2 P111～131
- ・山口博之 2017 「出羽国山形城下・細矢家の陶磁器」『日中韓周辺域の宗教文化Ⅲ』P103～122
- ・山口博之 2022 「山形県鶴岡市の白磁観音像2体」『貿易陶磁研究』No.42 P101～104
- ・葉文程主編 吳其生著 2002 「福建漳窯」『中国古陶瓷標本』P44
- ・葉文程主編 執行主編歐陽希君 2002 「南靖窯」『中国福建古陶瓷標本大系』P81
- ・葉文程主編 陳建中・陳麗華著 2003 「福建徳化窯」『中国古陶瓷標本』
- ・葉文程主編 2005 「徳化窯(上)」『中国福建古陶瓷標本体系』(『天工開物』)
- ・袁泉 2017 「首爾崇實大学教会博物館藏“聖母像”考」『文物』文物第8期 P89～96
- ・張雲英 1982 「明天啓年款白磁観音」『文物』12期 P16
- ・張金穎 2022 「送子観音：晚明海澄象牙人物的個案分析」『福建文博』2022年第2期 P36～45